

イチゴ炭ソ病の予防対策

2007.5.25

炭ソ病は糸状菌の一種で、たく葉やクラウン部で越冬し、20℃を超えるころから繁殖を始めます。30℃前後から 35℃が最も適温で、育苗期や定植後しばらくがイチゴのストレス期とも重なって発病が多くなります。伝染の経路は親株からが大半ですが、菌が土壌の比較的浅いところに棲むので、強い風雨や強めの灌水で土壌感染することがあります。

炭ソ病始め殆どの病害は、チッソ過多、密植、不適當な環境管理が引き金になりますので、菌自体の存在を懸念するよりこれらのことに注意することが肝心です。

定植までの予防対策

1. 罹病親株を使わない。
簡易エタノール法で保菌の有無を確認し、罹病株は処分する。ただ全親株検査は大変なので、無菌の二次親株を作って子苗を採る方法が重宝され始めている。
(この方法は今年には間に合いません)
2. 高設栽培にして、寒冷沙でなく雨よけビニールの屋根を設ける。
3. 過肥と強めの灌水は厳禁。
4. 「Si22」2000 倍液を数日おきに葉面散布する。毎日散布して小苗に作るのが望ましいところですが、品種やコストと相談ください。チッソ過多の大苗は駄目です。
5. もし症状が見えたら患部を処理して、2000 倍液を 5～6 日連続散布。新葉展開が始まればまず大丈夫。改善が無い時は 1000 倍液で処理してください。
6. 本圃土壌に「Si25」を 2 袋(6kg)散布する。土壌消毒する場合はガス抜け後にしないと、塩化ケイ素反応を起こして効果が薄れます。定植前に「Si25」を入れると微生物環境の改善と長期のケイ酸効果が期待できます。
7. 本圃土壌 EC をチェックして 0.25～0.3 あれば良。それ以下のときは 3kg・10 アール内で施肥。それ以上のときは基肥は入れないほうが無難。
8. 定植前日に 2000 倍液を苗ポットにたっぷり灌注する。(早い活着を促します)

定植後の予防対策

1. 「Si22」を2週に1回20～30アールあたり1本(500cc)を灌水装置で流します。(収量を目指す方は毎週流しています)
2. 2000倍液を2週に1回葉面散布します。
3. 灌水液肥は少な目が良い結果を生んでいます。(人によりますが、従来の1/2～1/5)草丈は小さくても果実は大きく育ちます。「あまおう」の場合、1番果の草丈20cm、2番25cm、3番30cmを目安にしていますが、このとき内葉数も3～6枚で展開し、出蕾も順調になるようです。
4. チッソ切れの気配は外葉、新葉の色抜け、外葉外縁の早い褐変が合図になります。リアルタイム診断が可能な場合は新葉から3枚目の葉の硝酸態チッソが2,500ppm(1月)～1,000ppm(3月以降)が目安とされています。このような状態になったときは化成肥料をチッソ1kg/10a投与してください。
5. 定植から2月一杯は「春が来たよ」の騙しの期間なので、品種や地域に合った適切な環境管理が大事です。加温、調湿、電照、サイドの開閉など上手な方を参考に勉強してください。
6. 本園で炭ソ病が発生した場合は前記5と同様の処理をしてください。それでも改善しないとき、100倍液をたく葉、クラウンに集中灌注して完治した症例が複数ありますが、くれぐれも参考としてください。
7. 大果品種では、チッソ過多は多病、奇形果を促す傾向がみられます。このようなときは水と「Si22」だけを投与してください。「とよのか」のように摘果を要する品種は養分の流亡が生じますので、肥料を効かせる作り方もありと言えます。
8. ケイ酸が効いているイチゴの姿
 - 立性が強く、がっしりとなる。
 - 葉色は若竹色から徐々に濃くなる。(濃すぎることはありません)
 - 根量が増え、樹勢が強い。
 - 果がしっかりし、糖度が2度程度増し、空洞果も減少。
9. 虫害抵抗性も増しますが、虫害は病気の引き金になるので、早目の薬処理が肝心です。ただケイ酸使用時はイチゴの新陳代謝が高まっていますので、薬害が起きるケースもあり、病虫害薬とも薄目の使用をおすすめします。